

負担軽い、脊椎手術

北海道MIST研究会

道内の脊椎脊髄外科の医師らが、患者の負担が少ない手術・最小侵襲脊椎安定化術(MIST)の発展と、若手医師の教育を目的にした「北海道MIST研究会」を設立した。代表世話人・製鉄記念室蘭病院の小谷善久副院長(日本脊椎脊髄病学会評議員・指導医)は「高齢化などで、背骨の変形などに悩む患者は、道内でも多い。MISTの普及と医師の技術向上によって、患者の負担軽減につなげたい」と、研究会設立の意義を話す。

MISTは、背骨の変形などを治すため、小さな切開部から患部となる背骨にアプローチする術式の総称。手術での切開が数センチ程度にとどまるため、出血の少なさや切開部の回復の早さ、さらにリハビリテーションへの早期移行も可能となり、「患者の負担が軽くできる(小谷副院長)という。MISTは主に米国で開発され、国内の医療機関でも徐々に広がりがつつある」という。ただ、医師の立場からみると、「高度な技術と、経験も必要とされる術式」(同)で、若手医師などへの教育の場の提供や、手技の伝承などが課題となっている。

代表世話人・製鉄室蘭病院 小谷副院長

「普及へ技術交流」

分科的な役割も担うMIST研究会が立ち上がっている。これらの動きに合わせて、道内では今年4月に「北海道MIST研究会」が設立された。小谷副院長が代表世話人となり、市立札幌病院整

(松岡秀宜)

形外科の奥村潤一郎部長ら3人の医師が世話人を務める。

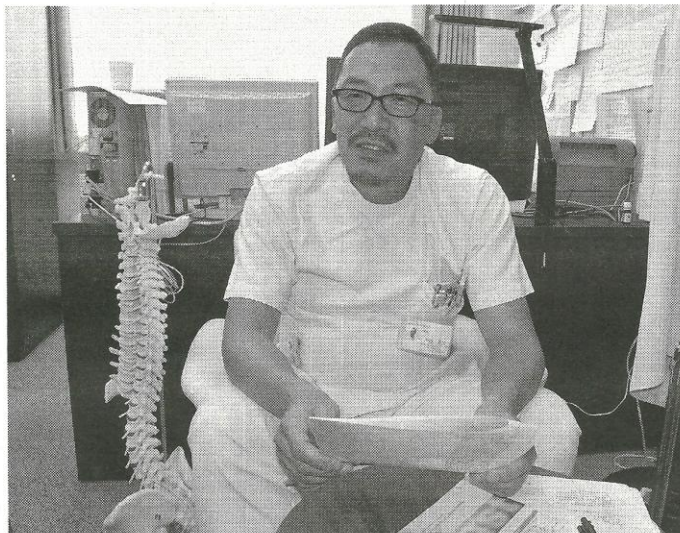
研究会では「講演だけではなく、現場の臨床医がすぐに役立つような模擬手術など、実践的な講習や実技指導を積極的に取り入れる」(同)という。手始めに、今年10月には札幌市内で研究報告会を開催する予定。この研究報告会には、関東や中部地方からも、すでに

演題応募が集まっているという。

脊椎脊髄外科に関する低侵襲化技術は、高精度コンピュータ支援技術との組み合わせなどで、脊柱変形や脊椎感染症、脊椎腫瘍、脊椎靭帯骨化症などの高度脊柱再建手術にも用いられている。このため「手術の精度と安全性が向上し、合併症低減などの観点からも、患者の安全性と負担の軽減に大きく貢献している」(同)という。

日本メドトロニック社(本社東京都港区)製の術中モバイルCTと、コンピュータナビゲーションシステムについて、昨年6月に北海道・東北地区で初導入した製鉄記念室蘭病院は、昨年10月に専門外来「脊椎・脊髄センター」を開設。脊椎手術の70%程度にMIST技術を応用しているという。

小谷副院長は「道内でもMISTに興味を持つ若手医師が増えている。知識と技術の交流につながるような章の根的な臨床医の集まりにしたい」と話している。



患者の負担が少ない手術・MIST普及の意義などを説明する「北海道MIST研究会」の代表世話人・小谷副院長

小谷副院長は「道内でもMISTに興味を持つ若手医師が増えている。知識と技術の交流につながるような章の根的な臨床医の集まりにしたい」と話している。